

書評・紹介

ツルティム・ケサン
小谷 信 千代 共訳

ツォンカバ著『仏教瑜伽行思想の研究』

向 井 亮

I

『ラムリムチェンモ』の「止の章」が、まさに最適の訳者の手でこのたび和訳され、出版になった。ツルティム・ケサン氏と小谷信千代氏によって共訳せられた標記の書である。両氏のご努力とその成果に対し、まずもって敬意と祝意を表したい。

ツォンカバ著『ラムリムチェンモ』は、正式の名称として、訳して「世に並ぶ者なき偉大なるツォンカバの造り給える菩提道次第大論」(本訳書二頁に挙げる訳による)が現に伝えられているように、ツォンカバを開祖とするチベット仏教はゲルグ派の頭教における根本聖典である(なお、『ラムリムチェンモ』の通称は、いまの具名中の「道次第大論」に当たる)。本訳書は、この『論』のあるまとまった部分の和訳研究であるが、その部分の本『論』全体における位置づけを知るためにも、まず、本『論』の結構を知っておくのが便宜であろう。幸い、本訳書には、本論和訳に先だって、「ラムリム」思想を理解するための資

料の一つとして、本論『ラムリムチェンモ』の内容を概括紹介したツォンカバ自身の著になる『ラムリム概要』が和訳されているので、いまは、その和訳に訳者が科文的に付した見出し項目を、そこに添えられた本論『ラムリムチェンモ』の対応ページ(青海民族出版社版)とともに一覧してみる。

一 序 論

帰 敬 偈

p. 1

ラムリム思想の特徴

pp. 3-20

説法と聴聞

pp. 20-30

二 本 論

師 事 作 法

pp. 33-61

瞑想期間外の休息時の作法

pp. 61-77

八難を離れた閑暇の獲得

pp. 77-86

下品のブドガラの道

pp. 98-205

中品のブドガラの道

pp. 206-280

上品のブドガラの道

pp. 281-340

発 菩 提 心

pp. 340-467

菩薩行の概説

pp. 468-808

菩薩行の中、特に止観の実践について

p. 488-

密教の学習

三 結 び

これによって、本論『ラムリムチェンモ』構成の大枠はおさえられよう。本訳書は、これでは例えば、「上品のブドガラの道」を明かす段の、「菩薩行の中、特に止観の実践について」を説

く内の、「止」についての部分——分量で『論』全体の二二パーセント——の和訳を主体としている。

ここで、本訳書に先立って出版されている本『論』の翻訳について見るに、全訳としては、五十数年前に法尊法師による中国語訳があり、『菩提道次第広論』、重慶・漢藏教理院、一九三六年、覆刻本・台北・新文豊出版、一九七五年）、部分訳としては、長尾雅人博士による「毘鉢舍那章」——右の概要一覧の中の「止観の実践」についての「観」の部分と、それ以下末尾までで、分量で『論』全体の三割——の和訳があり、『西藏仏教研究』、東京・岩波書店、一九五四年、一九七四年再刊、Alex Wayman 教授による「止観の実践」についての部分——『論』全体の四二パーセント——の英訳がある（*Calmng the Mind and Discerning the Real*, New York: Columbia Univ. Press, 1978; Indian edition, Delhi: Motilal Banarsidass, 1979）。また、本訳書と時を同じくして、Wayman 教授による「上品のブドガラの道」の中の「止観の実践」に先立つ部分の英訳が出版された（*Ethics of Tibet*, New York: State Univ. of New York Press, 1991）。これで「上品のブドガラの道」の全体——『論』全体の三分の二を占める——が英訳で読みうることとなった。

近年、わが国でも、ツォンカバないしゲルグ派を中心とするチベット仏教の研究は進捗をみせてきているが、それらは、先覚の翻訳に負うところが少なくないといえよう。先掲の『菩提道次第広論』の出版にみられるように、法尊師を始めとする中

華民国の学僧たちによって進められたツォンカバを中心とするゲルグ派の文献の翻訳の仕事は、わが国のこの方面の研究者に多大の恩恵を与えてきた（それらは、近年、台湾で大量に覆刻出版されている）。しかし、学問的研究となれば、先の長尾博士の労作『西藏仏教研究』がいまなお最も重要なものであることは言うまでもない。本和訳の共訳者の一人、小谷信千代氏は、本訳書の「はしがき」の中で「われわれのこの仕事は博士の偉業に導かれて歩みを開始したそのささやかな第一歩を記すもの」であり、本研究成果の刊行によって博士の学恩に報いたい旨のことを記している。

長尾博士の労作と、それを範とした本訳書とによって、われわれは、ツォンカバの最重要な作品の、その枢要部分を日本語で安心して読むことができるようになったわけである。よろこばしいかぎりである。なお、この部分には、前掲の Wayman 教授の英訳も存するが、この英訳の仕事は、本『論』に多く挙げられる引用ないし依用経論の典拠探索や引用文ないし依用箇所原文出处などの点で、また、訳語選定における伝統的仏教学の背景認識の点で、学者を十分に満足させるものでなく、本訳書でも、その注記の中で、その英訳の錯誤や不備が少なくとも三十数箇所にわたって指摘されている。

以上、はじめに、『ラムリムチェンモ』の翻訳研究における本訳書のおおまかな位置を、内容にたち入らない範囲で見たが、ここで望蜀の言を付すならば、本訳書の訳者は、「長尾」博士の偉業に導かれ、それを範として、本『論』中の引用経論と

その引用文を現存文献の中で可能な限り渉猟し比定するという骨の折れる作業をなしたのであるから、そのサンスクリット文については、長尾博士により試みられたように、注記の中にその原文を提示してほしかったし、また、その部分の「用語索引（サンスクリット）」を作成してほしかった。また、本文和訳では、長尾博士のように、引用文を改行二字下げにした方が読み易かったであろう。長尾博士が言われるように（前掲書、はしがき、二―三ページ）、「印度学的仏教学的見地からすれば、中心となることを梵語の形で考へることは重要である」からであり、そのような「索引」によって「本書が依用してゐる基盤的な術語のはばをおよそ知り得ることとなるであろう」からである。本訳書をものした訳者たちの意図も、次節に触れるように、単にツォンカバの思想、ないしチベット仏教の解明だけにあったのではなく、より広くインド仏教の解明にもあったことが、本訳書の「はしがき」や「訳者まえがき」の中のことばから知られるからなのである。

II

本訳書の内容は、およそ次のような構成次第をとっている。

訳者まえがき——解題に代えて—— (32 p.)

〔翻訳〕

第一部 「ラムリム」思想を理解するための資料

- I 『仏道実践の三要点』（ラムツォナムスム） (16 p.)
- II 『ラムリム概要』（ラムリムドゥウテン） (13 p.)

III 『ラムリムチェンモ』概観 (16 p.)

IV 『止の修習図』（シネペリ） (8 p.)

第二部 『ラムリムチェンモ』（止の章） (131 p.)

〔索引類〕 (8 p.)

I 用語索引（日本語） (2 p.)

II 止の章の用語・引用句索引（チベット語） (4 p.)

III 止の章の書名索引（チベット語・サンスクリット語） (2 p.)

〔Texts〕

I *Lam gts'o nuan gsum* (2 p.)

II *Lam rin bsdus don* (5 p.)

III *Zhi gnas dpe ris* (4 p.)

IV *Lam rin chen mo (zhi gnas)* (36 p.)

「訳者まえがき——解題に代えて——」では、まず、訳者の本訳書をものすに至った主な動機が明かされる。それは、趣意としておよそこのようになる——阿含や大乘の經典であれ、阿毘達磨や大乘学派の論書であれ、それぞれの成立の背後に「瑜伽行の実践者」たちの姿が想定されるなかで、特に「瑜伽行」を学派名の一部とする唯識学派の論書について、その行法の実際を明確に把握しようとするれば、例えば『撰大乘論』などではその説明が簡潔に過ぎる一方で、『瑜伽師地論・声聞地』ではその記述があまりに繁雑過ぎて、要を得ないが、『ラムリムチェンモ』の「止の章」に当たれば、要領を得た説明が得られる。すなわち、『ラムリムチェンモ』の「止の章」には……実に多く

の聖教と論書から影しい引用がなされているが、彼（『ツォンカバ』の正鶴を射た引用のお陰で、今やわれわれは『声聞地』のような繁雑な記述に対してもその要点を的確に把握する方が与えられたことを確信するからである」（一ページ）と。

次に、「まえがき」では、「三種の有情と彼らが修習する法」、二「『ラムリムチェンモ』に引用されるテクストの典拠」、三「止の章の用語と教義について」、四「本書の構成」が解説される。この内、一と二とは、共訳者の一人ツルティム氏の稿になる既発表の論文「ツォンカバにおける仏道体系」（『日本仏教学会年報』第五十四号所載）の序に当たる部分の再録であり、三は、ここでは大半の紙幅を割いて詳しく、（一）「沈み込み（*depa*、昂ぶり（*audhatya*）、念（*smi*）、正知（*samprajanya*）」、（二）「止には二つの側面が備わらなければならない」、（三）「止の時にも念によって対象を確認することが必要である」、（四）「沈み込みと塞ぎ込み」、（五）「観察の修習（*dpnyad sgom*）と安住の修習（*jog sgom*）」を解説するが、その（一）から（四）は、小谷氏の既発表論稿「沈み込み（*bying ba*）と昂ぶり（*rgod pa*）」（『仏教学セミナー』第五十号所載）の再録であり、その（五）は、前掲のツルティム氏の論稿からの再録である。初出時の若干のミスは直り、注記には校部建博士から寄せられた教示が加えられているが、注記などの一部に不統一・不用意の点が見られる。別個の既発表論文をつなぎ合わせたせいであろうか。

「訳者まえがき」に続いて「略号一覧」がある。ここには、テクスト、その他の諸文献が二十八点、その略号とともに提示

される。本訳書には、所訳の本『論』についての研究史の類は特に載せられておらず、また、本訳業における使用テクストや参考文献も別途に紹介されていないので、われわれはここからそれらの出版などのデータを知るのみである。たとえば、テクストについて「B. or B. 本：チャキュン版 青海民族出版社、一九八五年（本訳ではこれを底本とする）」では、専門家以外にとってはあまりに簡に過ぎよう。所訳本文について本書巻末にそのチベット原文を載せるにしても、本『論』（ないし、ツォンカバの著作）の出版事情や、ここに底本が選ばれた理由などは、解題に代えた「まえがき」の中でより詳しく言及されてしかるべきであつたらう。本評前節で管見ながら本論の翻訳史などに触れたのも、その簡を補ってみたからであつた。

さて次に、「翻訳」篇の構成についてであるが、「はしがき」の第四節に述べられる通り、訳者による読者のための工夫が施されている。それは、翻訳篇の主体となる「ラムリムチェンモ」の「止の章」の和訳に先立って、本論の主題たる「ラムリム」（修道次第）の思想を読者に理解してもらうための資料を和訳紹介する、という試みである。それが翻訳篇第一部の「ラムリム」思想を理解するための資料である。チベットの僧院では、「ラムリム」の教えを簡潔に記憶に留めておく方法として二種の常用聖典が日頃よく誦せられるという。その一つは、『ラムツォナムスム』と呼ばれるツォンカバが弟子に宛た書簡で、仏教実践の核心を「出離と菩提心と正見」の三点に要約した内容のものであり、他の一つは、前節に紹介したところの『ラム

リムドゥテン(『ラムリム概要』)というツォンカバ自身が造った四五偈から成る小品である。まずこれら二作品が和訳紹介された後、その前者の「仏道実践の三点」を参考にして訳者が選び出した『ラムリムチェンモ』の「止の章」以外の各章の重要な箇所が、『ラムリムチェンモ』概観」と題して和訳紹介される。そして、第一部の最後には、『止の修習図』(シネペリ)という、止の実践階程を分かり易く図式化した作品が紹介される。

この内、『ラムリムチェンモ』概観は、訳者の一人ツルティム氏の既発表の論稿「ツォンカバにおける仏教体系」(前掲)の本論部分を増広して再録したものである。ここで増広されたのは、『ラムリムチェンモ』の思想的に最も重要な箇所で、長尾博士の和訳が存する「観(毘鉢舍那)の章」のツォンカバ独自の中観学説の理解が明かされる部分であるから、「ツォンカバにおける仏道体系」の紹介だけに止まるものではなく、いま、訳出された中観思想に関する部分のみを、訳者が与えた内容見出しによって一覧しておく。なお、(一)内は、長尾博士訳の箇所をその章節で対照したものである。

(2) 空性の決定

(第二章 真実空性の決択)

(A) 否定対象をよく確認しなければならない理由

(五) 否定せらるべきものの正しき握把、全訳

(B) 否定対象をよく確認せず否定する他者の考え方の排除

(a) 否定対象の確認が余りにも広範にすぎる者の主張

(六) 虚無論的な空、全訳

(b) 否定対象を余りにも広く認めすぎる場合の過失

(i) 中観の特徴の確認 (七) 中観不共の勝法、抄訳

(ii) 否定対象を余りにも広く認める考え方が如何に中観派の特徴を破壊するか (八) 中観への邪解、全訳

(c) 中観派自体に於ける否定対象の確認

(第三章 誤れる空論と正しき空論、の内、一七 正しき否定の対象・一八 輪廻の根本―無明、全訳)

昨今、ツォンカバの中観思想や空性理解が注目されているなかで、右の箇所の和訳の提示は、あるいは一石を投ずるものとなるであろうか。いま、その和訳のごく一端を断片的ではあるが次に引き、本和訳に先行する他の学者の和訳文を対比してみよう。

「自性として空であるという場合の空性の意味は、縁起の意味であって、効果的作用 (arthakriya) が空である非存在の意味ではない」(本書、八五ページ。この箇所の注記で、次の松本論文を「参照」として挙げる。)

「自性について空であるという『その』空性の意味は、縁起の意味であって、果を生じる能力 (don byed pa'i nus pa, arthakriyāsāmarthya) について空である無 (dngos pa med pa, abhāva) の意味ではない」(松本史朗「ツォンカバとゲルク派」、岩波講座・東洋思想第二巻『チベット仏教』岩波書店、一九八九年、二四二ページ。この箇所に注記して、次の山口著書の箇所を挙げる。)

「自性について空しいとされる空性の意義は縁起の意味であ

って、効果的な働きの能力について空しいとされるような何ものもないという意味ではないのである」(山口瑞鳳『チベット』下、東京大学出版会、一九八八年、二八七ページ。この箇所には先行の本文中で、長尾訳について「博士の名訳があるが、学術的なものであるから、ここでは多少くだけた訳文で要所を紹介してみよう」と記す。)

「自性空なる空性の義(sūnyatā-ārtha)は、縁起の義(pratītyasamutpāda-ārtha)である。然しはたらきをも空する無体の義ではない」(長尾雅人、前掲書、一二三ページ。)

ツォンカバによれば、ここに訳文で引いた文言は、実は、「詳細で賢明で広大な観慧を備えている智者なる中観派と称される人」が、仏の究極の密意に依って大師釈尊とその教説とに対して稀有なる最高の念を生じ、その念によって惹き起された清浄なる言葉で以て声高に繰り返し語るところのものなのである(本書、八五ページ参照)。これらの訳文によって、その主張内容が端的に分かるであろうか。インド仏典における「空性の定型句」の読み方についてはやくに問題提起をした評者としては、いずれにも満足していない。特に、先行訳をふまえたはずの本書の訳は誤解を招きやすい。「○として空である」というのは具体的にどういう意味になるのであろうか。そして、それと「○が空である」とはどう関わるのであろうか。その○は、「A is empty」「empty of B」「A is empty of B」のAなのか、Bなのか、それともそのどちらでもないのか。右の他の訳文においても判明ではない。「空」の難しいところである(なお、

評者は、「空」の原語の用法のすべてを、漢語の「空」ないしその訓読みだけで和訳するのは無理ではないかと思っている)。

右には、教義的にも微妙で、あるいはチベット語だけで解せない箇所を取り上げてしまったが、本書の和訳によって、従来の訳では釈然としなかった点が判然とする場合も少なくない。いまはそのいちいち挙げないが、チベット文の保り方、繋がり方を解する上で参考になる点が多い。たとえば、先の引用文が納まる前後の文脈などがそうである(なお、本訳書、八五ページ、六行以下と、山口瑞鳳博士、前掲書、二八七―八ページの訳とを比べて見られたし)。

III

「翻訳」篇第二部は、本訳書の主体を成す『ラムリムチェンモ』(止の章)の和訳である。

まず、「止の章」全体の結構を、著者ツォンカバ自身による科文に基づいて立てられた本和訳の内容目次によって見ておく。

序論

本論

I 止の資糧に依るべきこと

II 止の資糧に基づいて止を修習する仕方

1 跏坐における身体姿勢

2 修習の順序

一 過失のない三昧を生じる方法

(一) 心を所縁に固定する前に行うべきこと

(一) 心を所縁に固定する時に行うべきこと

(二) 心を所縁に固定した後に行うべきこと (詳細)

二 過失のない三昧に依って心の安住が生ずる次第

(一) 心の安住が生ずる次第

(二) 六種類の力による心の安住の達成

(三) 四種類の作意

III 修習によって止が達成される基準

1 止の達成の境界

一 止が達成される境界そのものの説明

二 作意を備えていることの印、及び上来の所説中の

疑問点に関する審議

2 止に依る道の歩み方の概説

3 世間道の歩み方

一 止の獲得の必要性

二 止に依る欲界からの離貪

(いまは章をI・II・IIIで、節を1・2・3で示した)

この「止の章」の組織立てを眺めて、評者はすぐに『声聞地』

のそれを思い浮べた。実際に当たってみるとよく対応する。そ

こで次にその大体を対応させてみよう。

『声聞地』

初瑜伽処 (三地あり)

種姓地

趣入地

出離地 (世間道・出世間道の資糧を詳説す) …… I

第二瑜伽処 (1) (2) プドガラの品類差別・建立、

(3) 所縁、ないし (1) 瑜伽修など十九門あり …… II 2 (一)

第三瑜伽処

往詣・慶慰・審問・尋求

安立 (1) 定の資糧を護り養うこと

(2) 遠離

処所の円満

威儀の円満

心身の遠離

(3) 心一境性

(総説)

止品

観品 (四種の慧行)

(4) 障の清浄化 (止観の双運に及ぶ)

(5) 作意を修習すること

第四瑜伽処

世間道に往くこと (離欲と七作意が中心)

出世間道に往くこと (四諦と七作意が中心)

本訳書では、この組織立ての対応関係については特に述べら

れていないが、本論中の『声聞地』の引用のすべてを、訳者に

よって検索された『声聞地』の箇所にもどして並べてみれば、

このような対応関係がおのずと明らかになるはずである。実に、

ツォンカバは「止の章」の骨格を『声聞地』から得ていたので

ある。これについては、ツォンカバに至るチベットの「ラムリ

III 2
III 3

III 1

九種の心住 II 2 (一)
六種の力 II 2 (二)
四種の作意 II 2 (三)

II 1

ム」思想の伝統など、詳しく検討しなければならない問題も残っているが、ここでは、「止の章」が依拠した『声聞地』の実践教理的な修道論の大枠について、いまだ少し触れておこう。

『声聞地』は、四「瑜伽処」から成るが、内容的には前半の二瑜伽処と後半の二瑜伽処とに大きく二分されよう。その後半二瑜伽処のうちの第三瑜伽処は、前半二瑜伽処の所説を前提にしながら、ある面で実地的な修道論を、ヨーガの実習を始めようとする初学者と、彼にそれを教えるヨーガに熟達した師との関わりの場面から説き起こしている。すなわち、ヨーガの初心者が師の許に「往詣」してヨーガについて請問し、師がやさしい語で奨励し「慶慰」し、仏法僧への皈依や仏道への決意を「審問」し、その志願ないし性行について「尋求」してから、五つの事から——(1)定の資糧を護り養うこと、ないし(5)作意を修習すること——を「(如応に)安立」することを説く(「(如応)安立」は支婁訶、原語は“vinayati”)。これに因んでこの第三瑜伽処は、「(如応)安立」(支婁訶、原語は“viniyoga”)とも呼称されるように、たしかにへ実践教程を説くものといえよう。そして、この瑜伽処に直接的に続く第四瑜伽処(「世間出世間」とも呼称する)では、先の「安立」における(5)の「作意」を得たところの行者が趣くべき二つの道——世間道と出世間道——を説き明かすのである。

ツォンカパは、この『声聞地』の「安立」処と「世間出世間」処とに提示される初学のヨーガ行者のための実践教程の組織立てを、そこから「止観」の「観」に直接かかわる「心一境性」

の下の「観品」の部分と、「止観の双運」に及ぶ「障の清浄化」の部分、そして、「四聖諦」の觀察が中心となる「出世間道に往くこと」の部分を除いただけで、そのまま用いて『ラムリムチエンモ』の「止の章」の構成次第の大枠を組んだのである。そして、彼は、ここから除いた「安立」処の「観品」と「止観双運」との部分を使、「止の章」に続く「観の章」の中の相応の箇所で引用ないし依用しているのである(前掲、長尾和訳、三五五—三五八、三九一ページ)。

以上、『ラムリムチエンモ』の「止の章」全体の組織立てと、その組織立ての思想の一面面を、評者なりに、その背景をなした『声聞地』のヨーガ行者の「へ実践教程」との関係から見てきたが、これを踏まえていまだ一度本訳書の本論に当たるならば、あるいは新しい意味が読めてくるかもしれない。

『ラムリムチエンモ』は、この「止の章」ばかりでなく、その全編が、著者ツォンカパ自身が立てた科文のもとに、きわめて整然とした組織をもち、じつに緻密な構成をとっている作品であるから、われわれは、その組織立てとその組織立ての思想を了解しておくことが肝要なのである。なお、『ラムリムチエンモ』全編の構成次第を知るために便宜なのは、長尾博士によって要領よくまとめられたところのツォンカパ自身の科文である(『菩提道次第論科文(拔萃)」、長尾、前掲書、八〇—八一ページ、そのチベット原文、同書、横組一八一—一九ページ)。

さて、そこで、本論の内容にたち入ってみたいわけだが、紙幅にも余裕がなくなつたので、いまは、以下に本論の第一章(一)

と、第二章の第二節(Ⅱの1)についてのみ論及してみる(訳文、訳語、原語想定の問題、注記などにみられるミスや誤植など、細かい点については一切言及できない)。

まず、第一章(Ⅰ)の「定の資糧」についてである。

この段の内容は、主にカマラシーラの『修習次第Ⅱ』の所説に依っているが、その最後は、「真に止観の三昧を成し遂げようと思う者は、止のための支分、或は資糧、つまり『声聞地』に説かれる十三〔の資糧〕などに努めることが極めて重要である」と結ばれる。ところで、この『声聞地』の十三の資糧であるが、これについて訳者は、注記において(二三三—二三四ページ)、まず『声聞地』の「初瑜伽処・種姓地」に説かれる「涅槃法の縁」を十三種に数えて挙げるが、それは間違いである。なぜならばこうである。先に掲げた『声聞地』と「止の章」の対応関係の図式(以下「対応図」と呼ぶ)を見てもらえば、いまの章は「安立」の(1)に対応する。それでその箇所にあたれば、そこでは、「初瑜伽処・出離地」の中で「世間・出世間の二道によって離欲に趣くための資糧」として詳説されるところの内容項目を挙げている。つまり「安立」の(1)は「出離地」の所説を前提としているからなのである。先の注記において訳者もこの「出離地」のことを付記し、十三ではなく十四の内容項目を挙げているが、問題がある。たしかにその二道の資糧は漢訳などで一見、十四に数えられるが、その中の「聞正法」と「思正法」とはサンスクリット本に“saddharmaśravaṇacintanā”と在るように合して一項となるのである。そして、『瑜伽師地論』

の中でもその二道の資糧は、「資糧道の中の十三種」(撰決択分・有尋有伺等三地、同・聞所成地)、「十三種の資糧」(撰事分)としてすでに定着しているのである(拙稿「法の聴聞と思维」『藤田宏達博士還暦記念論集・インド哲学と仏教』、平楽寺書店、一九八九年、参照のこと)。

ここに問題にした十三種の資糧のうち、第五から第八に挙げられる四種のもの、すなわち、「感官を慎しみまもること」、「食において量を知ること」、「初夜と後夜とに覚寤のヨーガに勤めること」、「自覚しながら住すこと」を、インド・チベットの仏教の伝統では別して重視しているが、『ラムリムチェンモ』でも、「三ブドガラ道」を説くに先立って、この四種を「易く止観を引発する正因」として、『声聞地』の「出離地」の所説などを依用しながら詳しく説いている。すなわち、前の第一節に掲げた『ラムリム概要』の内容項目一覽でいえば、本論第二項目の「瞑想期間外の休息時の作法」の箇所においてである。当「止の章」の中でも、この四種を「沈み込みと昂ぶりの二つを共に除去するためには重要なのである」というように言及している。また、十三種の資糧の中の、第一と第二の「自の円満」と「他の円満」については、『ラムリムチェンモ』は、先の四種を説くに続いて、「八難を離れた閑暇の獲得」の箇所で、『声聞地』の所説などを依用しながら説明している。そして、本訳書の訳者は、『ラムリム概要』の注記の中で、この「自・他の円満」がチベット仏教の中で特異な意味をもつに至った経過を解明している(本書、四一—四三ページ)。これによって、評者など

は、長尾博士の和訳の中で釈然としなかった箇所の一つ（前掲書、三九六ページ、四行目）が正しく理解できたのである。

次に、第二章第一節（Ⅱの1）の「跏坐における身体の姿勢」についてである。

この段は、前段と同じく、まず、カマラシーラの『修習次第Ⅱ』ないし『修習次第Ⅲ』の所説に依って、身体の姿勢が備えるべき「八法」のことを説き、次いで、『声聞地』第三瑜伽処は「安立」の、その(2)「遠離」の中の「威儀の円満」（前掲の対応図を参照のこと）の所説に基づいて、仏陀により結跏趺坐が勧められた五つの理由を挙げ、最後に「このように先ず最初に身体の八種の姿勢、取り分け呼吸の調整を指示通りに行わなければならない」と結んでいる。

さて、ここに言う身体の姿勢についての「八法」、ないし、身体の「八種」の姿勢のことであるが、何を数えて「八」とするのであろうか。訳文の上にはそれが直接的に示されていないのである。なぜなら、ここでは「身体の姿勢が八法を備えるようにする。その際、足は毘盧遮那仏の跏坐のように全跏坐であっても……」というように足のことから始めて、眼、身体、肩、頭、齒と唇、舌、息のことまでのちょうど八項がそれぞれ一文を以って説かれるが、訳者は、跏坐の五つの理由の場合には各項に(1)から(5)と付して五項を明示しながら、いまの八項についてはそうしないからである。そして、いま一つは、「八法を備えるようにする。その際、足は……」と訳して、「その際」と訳した原語の “de la” を「その中」とは訳していないからである。

評者なら、単純に「八……法。(1)足は……(8)息は……」と「八法」を明示して訳したいが、そうしない訳者には何か配慮があるのであろうか。

評者がこのような一見ささいな事柄にこだわるのは、中国・日本、特に日本の坐禅が、かたちを重んじ、まさにそのことば自体が物語っているように、坐法を中心とし、その作法（坐禅儀）に厳しく、手足の組み方（左右の手・足の上下関係）や眼の開閉などについての議論が喧しいからである。本訳書のこの箇所によって、評者は、カマラシーラの著作の中に『天台小止観』に説かれる調身・調息・調心ないし禪門での坐法の規定に類する記述の存することを知り、インドからチベットの仏教ではそれがどうであったのかに興味を抱いた次第である。

カマラシーラでは、身体の姿勢における足から息までの八項の内容規定は存するが、『ラムリムチェンモ』の記述のように八項がきれいに区分されて項目化しているわけではない。本和訳で、「八法」がこの八項であると数字で項目化しなかった配慮もここにあるのであろうか。また考えられるのは、これはチベットの仏教で定着したことばと見られるが、「毘盧遮那の七法」(nam snan chos bdun) という言い方である。これは、先に引いた本論の記述や、その典拠のカマラシーラの著に「毘盧遮那仏の跏坐のように」とあるところから、それらに由来するのであろうか。その「七法」の内容は、『藏漢大辞典』によれば次のようである。いまは紙幅節約のため漢語訳で引く。

毘盧七法——(1)両足跏趺、(2)手結定印、(3)背椎正直、(4)

頸部微俯、(5)肩臂後張、(6)眼瞼鼻尖、(7)舌尖抵上腭。

この「毘盧七法」の言い方は、本訳者の一人ツルティム氏から教えられたのであるが、氏によれば、この「七法」に「息」の項を加えたものを「毘盧遮那の八法」というという。本論の当の「八法」がこの「毘盧の八法」を指すのであろうか。そうではないであらう。これは、本論に説く八項の内容と少しく異なるからである。本論の八項には「手」の規定がない。また「毘盧」には「齒と唇」の項がない。その他、項目立てにずれが存する。あるいは本和訳でその八項を「八法」と明示しなかったのもここに理由があったのであろうか。

いずれにしても、『天台小止観』や禪門の諸坐禅儀の規定と比べてみても、インドに遡って調べてみても興味深い点が見い出せるであらう。

本書の内容はまだまだ続く。読者の関心に応じて、いろいろな資料や観点を提供してくれるであらう。

IV

本訳書はまさに適訳者の手によって成った、と本稿の冒頭に言ったが、それは、周知のように、共訳者の一人ツルティム氏は、チベットはツォンカパを祖とするゲルグ派の伝統の中で仏教を学ばれた方であり、一方の小谷氏は、インド仏教は大乗瑜伽行派の文献に明るく、かねてその学説を実践論的側面からチベット所伝の注釈文献をも援用しながら解明されてきている方であるからである。そのようなお二人が協力してものされた本

訳書には、まさに本書ならではの優れた面が随所に見られる。それらは、たとえばすでに触れたところであるが、背景思想をおさえたテキストの文脈のとり方から、訳文中に括弧して補われることば、注記における出典の指示などや、解題に代えた訳者のまえがきにおいてのおのずと示されている。

それら訳者の配慮に注意しながら本書を読むならば、われわれは、インド仏教の正統的な「止観」における「止」のあり方を正しく理解することができる。最後に、その「止」そして「観」のあり方を端的に説く本論の一段を本和訳で引いておく。「或る人々は、心が無分別に安住していて、智慧の明瞭な力のないのが止であり、明瞭な力のあるのが観であると考えるが、それは正しくない。何故なら、止と観との規定を詳しく定義した、勝者（世尊）の言葉や、代理者（弥勒）の論や、無着の典籍や、『修習次第』などの典籍の中で、心が所縁に於いて一点に集注した三昧を止と言い、理解すべき事柄の意味を正しく思忖する慧を観と呼んでいることと矛盾するからである。殊に、無分別心が智慧の明瞭な力を有しているか否かということとは、三昧に心が沈み込むこと（*abhi*）が有るか無いかの違いであって、止と観とを区別するものではない。何故なら、全ての止の三昧に於いて憍沈は必ず浄化されなければならず、憍沈を離れた全ての三昧には必ず心の輝きが訪れるものであるからである。」（本書、一三六ページ）本書が広く読まれんことを心から期待したい。